

令和元年六月一日発行 第二十九巻第六号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第三三六号（毎月一回）日発行

槐 かい

岡井省二創刊

令和元年6月号



春の夢

高橋将夫

玉手箱開ければ一つつくしんぼ

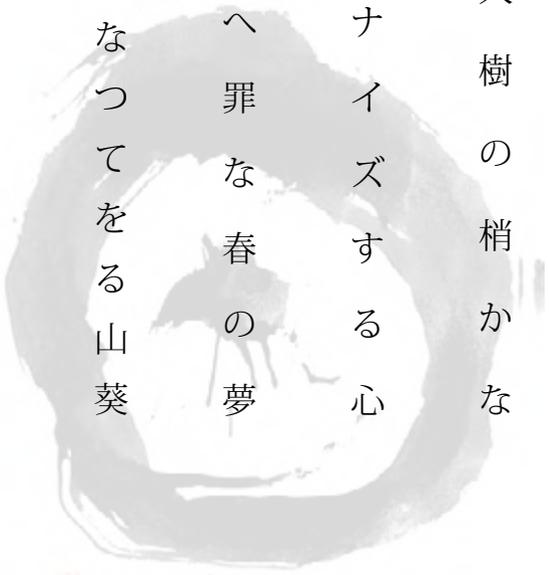
囀や少年少女合唱団

落書きをしてみたくなる春の天

佐保姫を追っかけてゐるパラッチ

初蝶や殺生石に来てとまる
白雲のごとく野を行く春日傘
雪解水目指す大樹の梢かな
春風にシンクロナイズする心
思ひだすことさへ罪な春の夢
侘びさびの利かなくなつてをる山葵
蟻穴を出て人類は星が出る

「俳句四季」巻頭3句



槐安集

水野恒彦

ひともとの楊貴妃櫻溺れけり
詩のやうに流れてゆけり春の峰
風の出も吐息のやうに櫻散る
啓蟄や全細胞の深呼吸吸
うつつより夢に帰らん落椿

加藤みき

忌明け待つや伊勢神宮のさくら花
春昼や不意に耳鳴りはじまりて
見付けたぞこれが狐の牡丹とや
春の闇テールランプのあかあかと
梅花藻は水の勢を受け流し

中島陽華

春の海天地無用の箱浮かべ
熊野路へ春のかざしは珊瑚玉
褒状に添へて六連島むつれの馬糞海胆
ながき日やひとに懐かぬ子に好かれ
花の径稚児行列の後に就く

竹内悦子

菜の花や風に潮の匂ひあり
海馬震へて目覚めたり春の雷
涅槃図に猫をる寺の息づかひ
葱百円大根百円梅三分
足の爪切りをる八十八夜かな



雨村敏子

百花繚乱三月の門を出づ
晩節や朧おぼろの道踏みて
誘はれてひとり来たりし春野かな
花びらの浮きたる水の昏れにけり
しろがねのアンモナイトや春の闇

本多俊子

くちびるにひと雫うけ桃の酒
水神のさざめき通る山葵沢
地に空に心に平和花すみれ
山清水じわりと命惜しめとぞ
億年のアンモナイトに春の塵

近藤喜子

別天地に遊べよ高き石鹼玉
日のあたる真ん中に揚雲雀かな
花あかり首ゆつくりと回しけり
囀や未来へとつながりし空
春雷やひとり歩きをする言葉

瀬川公馨

ほろ苦き変人奇人立金花
きみどりの湯気を吐きたる菜花かな
万巻の書があるあるぞ春の空
春の日のもち逃げしたる瓶の水
蛇穴を出づや粗末な庵あと

柳川 晋

耕すや天地のツボ感応す
春の虹その根に春の鬮されかうべ
本当は平穩な日々俊寛忌
屁の河童大手を振って春の昼
二十一世紀もやはり逃水か

熊川 暁子

父と子は別別に行く蝮の道
しづやしづ穀雨にひろぐ能衣裳
考へるふりしてい出し葦の角
京ことば雛のまはりに零れけり
日が点火せし紅梅の明るさよ

寺田 すす江

水底に日輪流る葦の角
先人に思ひを馳せり青き踏む
ゆるやかに芽吹きを誘ふ昼の雨
春蘭の恥ずかしげなり花もたぐ
きのふより一際白き雪柳

岩下 芳子

手を洗ひ耳を洗うて春の川
大手門 搦手門の桜かな
春分の風を掴まむ仁王の掌
声高にしやべり始めし土筆かな
雄叫びの殿となる春四番

有松洋子

人もまた多種多様なりうららけし
下萌や声を追いぬる赤子の眼
菜の花やこの世やさしき世と思ふ
地虫出づ五千ヘルツの耳鳴りと
能管の高音消ゆる梅の闇

岩月優美子

伸び代の無限にありぬ葦の角
牡丹の芽先は小町か楊貴妃か
山笑ふ釣られて我も笑ひけり
人生の起伏を埋める涅槃かな
木洩れ日の幽かに揺るる春障子

近藤紀子

風花に誘はれ叡電ホーム出づ
春シヨール鼓動をふはりつつみけり
渚春豊玉姫とハイタツチ
惜別や項に触れし指ぬくし
海境を辿り海市に行きつかむ

竹中一花

手の湿り胸の湿りや青楓
野火の色めらめら走る水もまた
つんつんと御所育ちなるつくしんぼ
チャリダーの春を漕ぎゆく雲の道
万里飛ぶ不死鳥の空朧かな

前田美恵子

野火立つや南北朝の戦跡
山城を占領したる恋の猫
春障子開くるや中庭にほひ立つ
菜の花と丈くらべする園児達
嘘七つつくや七色チューリップ

中田禎子

万屋の看板娘亀鳴けり
父と子の長堤はるかつくしんぼ
深呼吸五臓六腑に花の香を
億万年の地層の化石春の海
海中は大きい骨壺花吹雪

吉田順子

まなうらに母ある桜さくらかな
初蝶の舞ある白きいのちかな
湿原に日矢惜しみなし芦の角
天日に羽根を光らせ地虫出づ
囀やのたりと動く象の鼻



槐市集

杉原ツタ子

啓蟄の日のありどころ交野山
竹垣の風の戻りや椿園
ひとところ灯を残したる春夕焼
引き潮にころころころと春の海
連山の天突く鉄塔遠霞

高野昌代

杉花粉の乱舞の渦に山笑ふ
芳一の耳にも冴ゆるみすずの詩
天神の四方より春立て人の波
礼状の慎み深く花疲れ
虫出しの雷打てり鬼の山

竹村淳

三寒に水仙四温に梅開花
忍びつつあつく歌ふよ早春賦
観梅の静かなること梅の如し
老梅に夫婦の影の頼り添ひて
月の沙漠歌ひたくなる朧月

田中信行

一夜明け摩天楼の都会^{まち}春の雪
紅梅の日々匂ひ濃き社かな
平成のフィナーレとなる桜待つ
朝霧の猛き雷鳴春立てり
春雷の止みて青空坂の街



田中美恵子

新元号の風を待ちをる鯉幟
春昼の水輪広ごる番鳥
若者の未来明るき青胡桃
日の落ちて蒼白きかな枝垂れ梅
朧夜のビルの谷間や迷ひ猫

時 澤 藍

謡ひぬし雛の出迎へ公民館
雛仕舞ふ死語になりたる適齡期
まなこ閉じ春の香りを探しをり
春うらら九頭龍の面発光す
見上げぬる醍醐の桜準備中

中 貞 子

飛ぶやうにそよ風纏ひ豆の花
花種蒔く思ひ出す顔つぎつぎと
切り分けし種芋の肌エ灰まぶす
諸葛菜いにしへの色今にあり
どの子にも親はあるなり葱坊主

中 島 昌 子

こそばゆき水音流るる春野かな
霾天や畿内に残る古墳群
雛の間飾り終へたる空気かな
マカロンの色ころと鳥の恋
ピンぼけの時をしばらく春炬燵

中 谷 富 子

婿殿の育児休暇やチューリップ
自販機の軽き音して風光る
認知症たしかむ人や葱坊主
的を得ぬ返事してをり貝母咲く
彼岸桜咲き大空を見上げたる

中 西 厚 子

初めてのケーキ作りや春爛漫
カーテンを透かして光る春の月
逢引きや時間の止まる春の山
春の宵パン焼く匂ひしてゐたり
雲流るビルの揺れをり春の空

槐集

高橋将夫選

花衣ぬいで捨てたい思ひかな
大阪 江島照美

陶芸は炎の御霊かの子の忌
情熱の矛先狂ふ春の闇

梅が香の間にありし白昼夢

春霞天地をつなぐ衣かな

雪の夜や心音だけが刻きざむ
八尾 竹村 淳

春光や千の光の三輪素麵

騒がしき木木のおしやべり雪に黙

はやぶさがリユウグウ着地春ひかる

観梅にふふむ笑顔やふふむ梅
(二億四千万年の旅)

白梅や魑魅潜みてひとりごつ
大阪 藤田美耶子

神獣鏡に卑弥呼の祈り春霞

御神木に寄ればつつまる暖かさ

ぬぐひ去る少女の憂ひ桃の花

白木蓮光生まるるたなごころ

天地は萬物の宿櫻咲く
枚方 井上 静子

薯植える土の力を疑はず

菜の花の蝶と化したる風の中

ふたつとも答は正しさくらんぼ

はこべらに荷を降ろしたる空の青

青き踏みすつぼり我をぬけしもの
大阪 平野 多聞

山笑ふ笑へぬ日々もきつと来る

核ボタン押すのはクローンかもしれぬ

蠅生るる無常こそが生き甲斐と

春一番わたしの過去を擦り抜けて

春光や胸をひろげて呼吸吸
気枚 中 貞子

ものの芽の朝日待ちぬし息づかひ

遊覧船の波に遊びし春の鴨

失せ物や失敗談や山笑ふ

ふらここや善と悪とが前うしろ

銀河往來

◆槐集観照

花衣ぬいで捨てたい思ひかな 江島 照美

大切にしておきたい花衣であろうに、脱ぎ捨ててしまいたい
思いとは…どんな思いだったのだろうか。

〈陶芸は炎の御霊かの子の忌〉〈情熱の矛先狂ふ春の闇〉〈梅
が香の間にありし白昼夢〉〈春霞天地をつなぐ衣かな〉…どの
句もみなこの作者ならではの抒情。

春光や千の光の三輪素麺 竹村 淳

素麺の白い輝きが鮮やかに目に浮かぶ。

〈雪の夜や心音だけが刻きざむ〉〈騒がしき木木のおしやべり
雪に黙〉〈はやぶさがリユウグウ着地春ひかる〉〈観梅にふふむ
笑顔やふふむ梅〉…どの句にもこの作者ならではの視点がある。

御神木に寄ればつつまる暖かさ 藤田美耶子

御神木にはたしかに御神木ならではの暖かさがある。

〈白梅や魑魅潜みてひとりごつ〉〈ぬぐひ去る少女の憂ひ桃の
花〉…どの句もこの作者ならではの感性。

ふたつとも答は正しさをくらんば 井上 静子

「どちらも正解ですよ」という作者の心根に惹かれる。

〈天地は萬物の宿櫻咲く〉〈薯植うる土の力を疑はず〉〈菜の
花の蝶と化したる風の中〉〈はこべらに荷を降ろしたる空の青〉
…どの句にもやさしさがある。

青き踏みすつぼり我をぬけしもの 平野 多聞

春の野山を散策して心が洗われた心境がよく伝わってくる。

〈山笑ふ笑へぬ日々もきつと来る〉〈核ボタン押すのはクロウ
ンかもしれない〉…どちらの句も核心に迫る。

失せ物や失敗談や山笑ふ 中 貞子

心のゆとりが感じられてほほえましい一句。

春満月ノックは三度と決めおける 久保 夢女

ノックは三度。それ以外は私でないので用心。満月の夜は
狼かもしれないよ。

囀の発信基地は三河富士 犬塚李里子

囀にも発信基地があるようだ。しかも三河富士であるとい
うから痛快。

囀に包み込まれて我も鳥 柴田 靖子

囀の中にいて鳥になった気分…実によくわかる。

春雷や人の心は多角形 三木 亨

心にはいろんな側面がある。丸でなく角(かど)もある。

丑三つ時三人官女入れ替はる 中西 厚子

単に入れ替わっただけが、丑三つ時だけに怖い話。

〈以下略〉